
ブリザードとスノーガール。

雲霧 柚留

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブリザードとスノーガール。

【Nコード】

N5491L

【作者名】

雲霧 柚留

【あらすじ】

天然ボーイキラーでボーイッシュな「雪女」(ゆきめ)はある日、一人の男の子に恋をするが・・・

設定

はい、初イナイレ夢小説。うん、吹雪好きです。

設定

名前・火月ひづき 雪女ゆきめ

性格・ツンデレ、クール、天然ボーイキラー、無口

髪の毛・ホワイト（脱色とかじゃないよ）

容姿は・・・こんな感じかな？

追加とか捏造とかありまくりです、きつと。

天然ボーイキラーなヒロインは、サッカーになると熱くなります。

クールがヒートになります（意味不明）

連載増やし過ぎだって？いいじゃまいか14本くらいあるけど気にしないほうが。

雪女Ⅱ女だけど男の子に近いキャプテン（前書き）

雪女は、「揺理籠学園」から転校する設定。

え？ネーミングセンスが無い？はいそうですが何か
サッカー部に女の子は雪女だけです。

揺理籠学園サッカー部のみ名前表示

雪女ちゃんは男っぽい女の子で、口調も大体男です

雪女Ⅱ女だけど男の子に近いキャプテン

揺理籠学園サッカー部

シ「おい、雪女」

雪「雪女って呼ぶな、部的时候は「雪」と呼べ、シオン」

シ「どうでもいいだろ？ドリンク2、3本余ってるか？アルコとマルコがやられた」

雪「はあ？熱中症か？」

シ「まあ、そういうところだろう」

ア「雪さあゝん……」

マ「早くううう……」

雪「ほら、俺特製だ」

パシッ

ア「雪さん、せんきゅーです」

雪「ドリンクの管理くらいお前がしろ、シオン。次期キャプテンだろ？」

シ「そうだったな……」

俺は今度転校する。

えーと……どこだったかな……たしか……らい……なんだっけ

まあいいか。

雪「ちゃんと今日の宿題やったか？」

マ「ゴクゴク……アルコ、お前やったか？」

ア「うくうく・・・マル」こそやったのか？」

シ「やべえ、俺はやってねーぞ」

雪「俺もだ。おいクロウ、写させる」

ク「何で俺が処理する前提？」

マ「処理とかひでーし！！」

雪・ク「だって処理するノのはお前ノじゃないですかー」

ア「うわ、息ぴったりじゃん（泣」

キキッ

シ「え？今の音なんだ？」

ア「車っぽい音でしたねー。」

雪「そうだな、見に行くか？」

何かが変わる。俺は何故かそう思った。

私たちはあの後グラウンドに出て、あの音の原因を見に行った。

ア「あ！！あれって今噂の雷門中の紋章じゃん！！」

雪「何処にあるんだ？」

マ「ほらそこだって！」

そこにはイナズマイレブンの車があった。

ガラッ

「ひゃー！！此処が揺理籠学園か！」

中からはオレンジ色の・・・？

頭に何かを巻いている男の人が出てきた。

ア「雪さん、誰かをスカウトしに来たんでしょーか？」

雪「俺たちを？まさか」

俺たちのサッカーチーム「スノウボーイガールズ」はそこそこ強い。
だからってありえねえよな・・・

そつしたら女の人が出て来て俺の方へ歩いてきた。

「初めまして火月さん。ちょっとお話良いかしら？」
「は、はあ？」

え？ え？ え？
俺、ですか？

なんかアルコとマルコがめっちゃめっちゃ嬉しそうな顔で見てるし！
ちょ、手振るなよ！シオン止めるよ！

「初めまして！！俺はイナズマイレブンのゴールキーパーの円堂守だ。よろしく！！」

そう言つて俺に握手をしてきた。

雪「俺、火月 雪女だ。一応女・・・だけど練習中は「雪」って呼んでもらつてる」

あはは

俺、コミュニケーション苦手なんだよ。

しかもこの人絶対熱血系だろうな・・・

「そして私はイナズマイレブンの監督吉良瞳子よ、よろしく。今回此処に来たのはあなたをメンバーに入れたと思ったからよ。是非私たちと一緒に来てくれないかしら？」

やっぱりスカウトか。
でも・・・

「すまねえが遠慮しておくぜ・・・。」
「何故？」

「俺は今度転校する。だからキャプテンを引き継がせなきゃならねーんだ。だからお引き取り願ひ」駄目ですよユキメちゃん。「アルコ！シオン！」

俺は瞳子監督と円堂君と居たはずなのに・・・

ア「俺たちはこの人達の実力を見ていないですよ。」

シ「そうだぜ！おまえはレオの事気にしてるかもしれないけど、みんなは絶対そんな事望んでねーと

思うぜ。一回戦ってみて考えたらどうだ？」

雪「二人がそこまで言うのなら・・・ではお手合わせをしてから考える。ついてきて下さい。」

アルコ、シオン、みんな連れてきてくれ。」

シ「おう！俺は一年呼んでくる。」

ア・マ「では俺たちは残りの人を呼んできます。雪さん、先行つててください。」

雪「（やっぱり双子だな・・・）分かった。」

そうして運命のサッカーがキックオフした。

（「女の雪王」がどれだけの実力が見せてもらっわ。）

続く

女一人でもパワーは十分

雪「相手は日本1だから手加減はいらねえぞ。全力を出して勝利してみろ！」

ア・マ「双子パワーで負けません」

シ「おう、任せとけ」

「了解！」

ピーーーーー！！

（（キックオフ））

雪「行くぜ！アルコ！マルコ！」

ア「はい！」

そう言つてアルコとマルコはゴールまで突っ走って行った。

雪「あの二人の早さはピカイチ。誰か付いてこれるかな？」

俺は挑発するように言った。

雪「アルコ、マルコ。一気に決めろ！」

ア「じゃお言葉に甘えて。」

ツインズ・オブ・アイシクル!!!!!!

「たあああああつ!!」

ゴットハンド!!!!!!!!!!

シュウウウウ

「ふー、つえーな!!」

雪「あんなに近いツインズ・オブ・アイシクルが破られるなんて・
・・・」

やべえ・・・

雪「ワクワクが止まらねえ・・・っ!!」

雪「次、俺が行くよ。」

俺はシオンに報告した。

シ「おつ、久しぶりに雪が出陣か？」

雪「ああ。久しぶりに・・・燃えて来やがった！」

シ「そうか。あんまり熱くなり過ぎないでくれよ。」

ボールが来た。

雪「分かってるぜ。んじゃあ行ってくるぜ。」

一気にスピードを上げた。

雪「はああああああっ!!！」

ドンッ

スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード!!!!!!

「たあっ!!！」

マジンザハンド

バキッ

「おわっ!?!」

(((ゴーーーーール!!)))

雪「よっしゃあ!!」

久しぶりのゴール。

嬉しくって、楽しくて!!!

雪「久しぶりにゴールだぜ!」

「はい、そこまで。 どう?試合をしてみて?」

雪「やっぱり強いチームと戦うのはたのs・・・いやいや。」

シ「もう見栄を張らなくてもいいんじゃないの? 行ってこいよ雪。」

ク「そうですよ、こんなに生き生きしてる雪さんは久しぶりでした。」

マ・ア「カッコよかったです、雪さん!」

うんうん、とみんなも首を縦に振っている。

雪「シオン、アルコ、マルコ・・・みんな・・・よし。瞳子監督、よろしく願います。」

「じゃあ龍崎雪女、貴女をイナズマキャラバンの一員として正式に認めます。」

雪「ありがとうございます。今後よろしく願いますぜ!!」

今日は久しぶりに筋肉痛になった。

続く

女一人でもパワーは十分（後書き）

「ツインズ・オブ・アイシクル」

「スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード」

・・・自分で書いといてなんですが・・・カッコいいぜ！
そして長いぜ！

女で悪かったな・・・（前書き）

雪女ちゃんは、他に技を持っています。

前話参照の

「スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード」や

「アイシクル・フォール」

「スノーフォール・オブ・ブリザード」

「ドラゴン・アイシクルブリザード」

「アイシクル・オブ・フォール」など。

女で悪かったな・・・

チュン チュン

「・・・そうだ、俺はイナズマキヤラバンに居るんだった・・・」

俺は今イナズマイレブンの一員として一緒にエイリア学園を倒すことになった。

私起きた時には、半分くらいの人が起きていた。

「おっ！起きたか火月。今日はおまえを含めて一緒に特訓をするんだ！

女だからって容赦はしねーぞ。よろしく頼むぜ。」

「分かったキャプテン。あと私は揺理籠で練習中は「雪」って呼ばれてたから、

そう呼んでほしいんだけどよー」

「分かった！なら俺もキャプテンじゃなくて円堂か守って呼んでくれ。」

「了解。じゃあ守って呼ぶ。」

「ああ！分かった。じゃあ後でな！」

そう言って守は何処かへ行ってしまった。

（あの熱血キャプテンなら信頼できる。） （頑張ろう。）

そのあとご飯を食べて、

特訓がはじまった。

練習試合では、アイシクル・オブ・フォールが立向居君にクリーンヒットしてあせったぜ

まさか顔面に当たるなんて・・・みんな目が点だったぜ

俺は悪くないんだよ、きつと！・・・ボールが悪いんだ。

くそう、入ってそうそう変なイメージがついたじゃねーか！！立向居君、ほんとにごめんね。

後、お願いみんな、俺は怖い子じゃねーよ！！

だから恐ろしいものでも見るような眼で見るの止めてくれよ！（泣

夕飯を食べてみんな寝てしまった。

でも何故か俺は寝れなかった。

そりゃあ、顔面に当ててすぴーと寝れるわけ無いって。・・・外で星でも見よう。

そして空を見上げた。

「おー綺麗だな。明日は晴れだな。」

空はとてもきれいだった。

「ほんときれいだね。」

・・・え？

「誰だ？」

「吹雪士郎だよ。よろしくね、雪女くん。」

「・・・俺は一応女だ。」

「女の子だったんだ。ごめんね、男の子に口調とかそっくりだから・・・」

「別にいい。よく間違えられるから。・・・吹雪君？士郎君？どっちが良いか？」

「んー、じゃあ士郎で。呼び捨ての方がいいかな。」

「分かった。私も雪女でいい。でも、練習中は「雪」って呼んで。」

「うん。そういえば変なこと聞くけど、雪女はどうして男の格好し

て、サッカーしてるの？」

「亡くしたんだよ・・・家族全員。大雪で、がけがわからなかったんだ。俺だけ助かって・・・」

兄貴、アキトって言うんだけど、好きだったんだよ、サッカー。

兄貴のかわりに、男の子にはなれないけどサッカーするって決めたんだ。」

「僕もね、双子の弟が雪崩に巻き込まれて死んだんだ。

敦也って言うんだけど、その時僕だけがたすかって家族みんなが亡くなった・・・」

「ぼくも雪女の気持ち分かるからたまに相談に乗るよ。」

え・・・

士郎も大切な人を亡くしていたんだ・・・

「俺ね、兄貴たちを助けるために、必死で引っ張ったんだ。でもね小学生の体力なんか

知れてるだろ・・・？兄貴は私を助けるため、手を離れたんだ・・・

・そのとき、

兄貴の時計が鳴ってた。だからもう目覚ましとか聞けないんだよ・・・」

気付けば俺は泣いていた。

こんな風に兄貴のことを深く話したのは初めてだったから・・・

「僕も暗い所が駄目なんだ。雪崩の時の恐怖が思い出してしまうからね。」

士郎はにこっとして私を慰めてくれた。

「士郎、子供みてーだぞ」

「……………（黒笑）」

士郎、

笑い方が黒いよ……………？

怖いですコワイですこわいです

「すみませんでした。」

「じゃあ、もう寝ようか。」

「そうだな。」

そう言っただけで私たちは寝る支度をして、
眠りに就いた。

続く

女で悪かったな・・・（後書き）

黒土郎好きです・・・

嫌だ、嫌だっ！

スー
スー

グ
ガ
ー
ー

いびきや寝息が響くキャラバンカーの中で私は寝息を立てて寝ていた。

אֶתְּחַלֵּץ אֶתְּחַלֵּץ

そんな静寂の中機械音が響く。

ドクン

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

「離せ！お前は生きろ！」

ドクン

「やだっ！この手、絶対に離さない！お兄ちゃん！」

「雪女……」

するっ・・・パツ

ドクン

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！」

「生きる。どんなことがあってもお前だけは生きる！」

「嫌だぁーーーーっ!!!!!!」

「いけないっ!!早く目覚ましを切って!!」

吹雪がそう叫んだのが聞こえたけど私は意識を手放してしまった。

吹雪 side

「嫌だぁーーーーっ!!」

雪女が叫んだのが聞こえた。

そうだ、雪女は目覚ましが怖いんだ!!

「いけないっ!!早く目覚ましを切って!!」

僕がそう言ったら雪女が倒れた。

「どうしたの!?!何の騒ぎ!?!」

瞳子監督が来た。

「えっと、急に雪女が叫んで・・・」

キャプテンが監督に話しているけど、多分キャプテンにはわけがわかっていないだろうな。

「監督、雪女は目覚ましの音が聞けないんです。昔のことを思い出してしまう、
と言っていました。」

「そう、じゃあ龍崎さんを寝かせておいて。みんなは朝ごはんよ。」

そう言って監督は何処かへ行ってしまった。

吹雪side終了

「ん・・・・・・・・」

目を覚ましたら秋ちゃんと春奈ちゃんと士郎がいた。

「あ、雪女ちゃん！よかった〜気がついたのね！！」

「大丈夫？雪女。」

「うん、ありがとう。みんなはどうしたんだ？」

「練習中だよ。」

「でもびっくりしました。急に叫びながら雪女先輩、倒れちゃったんですから！！」

「あはは・・・ごめんね。」

「でも知らずに目覚ましかけてて、ごめんね。」

「いいんだよ、別に。」

俺はベッドから起き上がった。

「ど、何処行くんですか！？」

「え？何処って練習だけ・・・？」

「今は安静にしてなきゃ！」

「いいよ、さっき倒れたのは精神的問題なだけだからな。でも心配してくれてありがとう。」

俺はにこつとほほ笑んだ。

「行ってきます。士郎も行くぞ。」

「え！／＼／ あ、うん！」

そう言ってみんなが練習しているグラウンドへと駆けて行った。

（女の人の笑顔に惚れることって、あるんだ／ですね・・・／
／／／）

春奈と秋はほとんど同じことを思っていた。

（わ、笑うと女の子なんだ・・・）

そして士郎も。

続く

技は出しすぎても駄目になるんだぜ

スノーホワイト・オブザ・アイシクルブリザード！

ムゲン ザ ハンド！！！！！！

バキッ！！

「ってうわっ！！」

私はみんなと合流した後、立向居君と練習をしている。

「練習は良いけどよ、昨日みたいになるなよ？そんだけ忠告。」

「はい。すみません、もう一回おねがいます。」

これで何回目だろうか？

「頑張ってるのはいいけどよ、立向居君もうボロボロだぜ？マジで大丈夫なの？」

あ、珍しいな。

俺が言うのもなんだけど、人のお世話はほとんど焼かない。

「はい、大丈夫です。もっと・・・もっと強くなってみんなの役に立ちたいんです！！」

雪先輩は大丈夫ですか？」

この子、偉いな。俺と大違い・・・

自分が自分で泣けてくるよ、こんな性格（泣

「俺は大丈夫。シュート打ってるだけだから。」

行くよ、と言って私はまたボールを蹴った。

午前の特トレーニングが終わり、

お昼ごはんを食べて居る時、春奈ちゃんが私に話しかけてきた。

「雪先輩、ドラゴン・アイシクルブリザードって何ですか？ データで見たんですが、

一回も見せてくれたことないですよ？」

ギクッ

「は、春奈ちゃん何故そ」そんなのか！まだ新しい技があるのか雪！！俺たちに見せてくれよ！！」……………」

守はキラキラした目で俺を見て来た。

「守………… そんなキラキラした目で見られても……

これは二人用の技なんだよ。監督はこの技、知ってますよね？」

そう言ったらみんなが監督の方を見た

「ええ。誰にも止められないといわれている伝説の必殺技、だと私は聞いて居るわ。」

「はい、俺は兄貴と一緒にこの技をしていましたが、この技は誰にも止められたことはありません。」

それに止めさせる気はありません。」

「すごいな、雪!!!　ますますその技が見たくなったぞ!!!」

「大した意気込みね。私も円堂くんの意見と同じよ。それじゃあその技を打てるパートナーを決めて、その技を今度の試合の時まで完成させなさい。」

「……はい？」

え？

「今、何と……？」

「パートナーを決めて確実に今度の試合までに戦力にきなさい!!!　以上よ。」

お昼を食べた人から各自トレーニングをして。」

そういうと監督は何処かへ行ってしまった。

アレは兄貴と一緒に開発した技で、兄貴はこう言ってた。

「この技は、俺とお前だけの技だ。盗ませないし、盗ませる気も無い。」

そう思って私は重いきり頂垂れた。

監督、貴女は鬼ですか、魔物ですか、悪魔ですか（泣

ほんとにどうしようかな……

その後に食べたご飯は味がしなかった。

兄貴、やっぱりあの言葉嘘だよな？

「はーどうしよう・・・」

俺はずっとその言葉を繰り返していた。

だって、兄貴の言うことだぜ！？マジに決まってるだろ！？

「なら、全員と試せばいいんじゃないか？」

ん？守・・・

「有り難う！！その手があったぜ！！！！」

あまりにうれしくて、思わず守に飛びついてしまった。

「お、おわっ／＼それじゃあまず俺とやってみるか？」

「ああ、あの技はさ、結構難しいんだよな。」

龍だけのなら１人で出来るからさ、俺の見てて。あ、立向居君ボールかして！」

立向居君からボールを借りた後、ドラゴン・アイシクルブリザードの体制になった。

「たあっ！！」

俺は叫んでゴールに集中すると、ボールを思いっきり蹴った。

ドラゴン・アイシクルブリザードver・ドラゴンシングル!!!

ボールにドラゴンが巻きついたと思うと、

そのままボールは地面に急降下し大きな穴をあけた。

「あ、やべえ。兄貴が死んでからやってないからやっぱりコントロ
ール出来なかった・・・」

あれ、みんなの反応がない・・・？

「お前すげーな!!」

「これ、誰も止められない意味がわかったよ。」

「一人だけでこれだけの威力とは・・・思っていた以上だ。」

反応が遅かっただけか

ほんとひやひやさせられるな、このチーム・・・

「はい、じゃあ守やろうぜ。」

「おう!!行くぞ!!」

そう言っただけで私たちはボールを蹴ったけど、
私と守とは出来なかった。

「うん・・・俺じゃないのか・・・。次誰がやるんだ？」

「じゃ、僕がやってみるよ。」

そう言ったのは士郎。

「ん、分かった。」

「この技僕らで出来るといいね。」

「んー・・・そう願うぜ。」

「／／／うん。」

あれ？

士郎の顔が赤い・・・？

俺、早く相手を見つけてこの技完成させたいんだけど。

「行くよ、士郎。」

「うん。」

「「たあああああつ！！」」

俺たちはボールを蹴った。

続く

兄貴、やっぱりあの言葉嘘だよな？（後書き）

関係ないけどアイス食べたい

・・・嘘だろ？（前書き）

雪女ちゃん途中から『』になります。

・・・嘘だろ？

ドラゴン・アイシクルブリザード！！！！

そう言つてボールを蹴ったら俺からドラゴンが、
士郎からは吹雪が出てきた。

そして吹雪とドラゴンは、天を駆けて
ゴールにボールが突き刺さった。

そしてゴールのネットを引き裂いた。

「で・・・できた・・・出来たぜ！士郎！」

「出来た！！僕ができるなんて・・・びっくりした！」

俺たちが歓喜に浸っているとみんながこっちに喜んでいる顔と青い
顔をしてきた。

「すごいな！！お前ら！！ これだつたらエイリア学園なんて簡単
に倒せちまうな！！」

「でもどーすんだ？ ゴール破けたぞ・・・」

「あ・・・」

や、やばーい

絶対夏末におk「あゝなゝたゝちゝ！！」
・・・やば

「「うゝ、ごめんなさい！！」」

「待ちなさい!!」

そう言つて俺と士郎は走つて夏未から逃げた。

そのあと散々夏未に追いかけられた。

鬼のような形相をして追いかけてくる夏未には恐怖しかなかった。

いや、人間つて此処まで怖くなれるもんなんだね。

『はあゝ疲れた。』

やつとお咎めが終わつた。

さて、ご飯でも食べようか

>>>>いただきまーす!!<<<<<

今夜は俺の大好きなハンバーグだ!!

おいしそう

パクッ

.....

『春奈ひゃん。』

「はい?つてどうしたんですか!?

そんな涙目で!!!??」

『かひやくてひにほう（泣たしけふえー）（泣　＞訳：辛くて死にそう）（泣助けてー）（泣＜』

今なら口から火が吹けそう・・・

「ウツシツシゝ　素直に食べてやがんのゝ（笑」

「　小暮君！！　何回悪戯したら気が済むの！！　こら、待ちなさーい！！」

『ほひゅれ！おひやえのひひやひやだっひやのか！＞訳：小暮！お前の仕業だったのか！＜』

そう言つて小暮君を追いかける春奈ちゃん。

つてか、助けて春奈ちゃん！！

俺、死にそうなんだけど（泣

みんな笑つてるし！！なんですか、放置！？

放置の割にはお口の中が大火災なんだけど！！

ひりひりするーーーー（泣

「大丈夫ですか！？雪女先輩！　これよかつたら飲んでください。」

そう言つて水をくれたのは立向居君

何君？天使？

嗚呼、やっぱ君は良い子だね！！

『あふいがひよう！！　＞訳：有難う！！＜』

それから水を飲んで元気になった俺はこつてり小暮君を懲らしめたあと、士郎に呼ばれた。

「ちよつと良いかな？」

『え、うん。良いけど?』

何かあるのかな・・・?

「、告白・・・？」

士郎はキャラバンのところで止まってくれた。

『なあ、何があつた・・・』

そう言いかけた途端、士郎が抱きついてきた。

『！！！？？ちょ、士郎！！！？？／／／／／』

俺は急なことに驚き、赤面した。

「今日、僕すっかり気付いたんだ。雪女、君の事が好きだよ・・・」

え・・・／／／

まさか、まさかこれってこ、告白う！？

『え／／／そ、な急に言われても・・・』

「だから返事は今度聞いていい？」

もうすでに私の頭はオーバーヒートしていた。

じゃあね、と言って士郎は何処かに行ったけど、

俺はしばらく体が動かなかった。というか俺、男女だけどさ！

え？コレなんかのドツキりだったら嫌だよ？

必殺技の相手が見つかった。それは嬉しいことなんだけどそんな、告白って・・・俺の気持ち、どうなんだろう？そして新たな試合場所が決まった。

え・・・？

揺理籠学園！？ うそでしょ！？俺の（元）学校が、次の標的・・・

・

あいつら・・・絶対悪さしてるううううう！！

（特にマルコとアルコ！）

続く

恋心・・・かぁ

あれから私は当てもなくそこら辺をぶらぶらしていた。

「今日、僕すっかり気付いたんだ。雪女、君の事が好きだよ・・・。」

あんなこと言われても、俺には分からない・・・。
どうすればいい？こんな男女な俺でいいのか？

心のもやもやが増えていく。
心と表情が連鎖的に曇っていくのが自分でもわかる・・・。

『ハア・・・。。。』

自分でもびっくりするくらい大きなため息が出た。

「どうしたんだ雪女？何か嫌なことでもあったか？」

あ・・・。。綱海さん

『ちよつといろいろあつてな・・・。。。』

俺は綱海さんならたぶん大丈夫だと思って、さっきあったことを全て話した。

「ふ〜ん・・・。。で、雪女は吹雪の事如何思っただ？」
『優しいけど、黒いって思う。』

「・・・。。そうか、じゃあ他のメンバーはどう思っ？」

『え？　じゃあまず円堂君はすぐサッカー好きだと思っし、豪園寺君はサッカー目茶苦茶強いし』

「・・・・・・・・・・・・・・・・小暮君は悪戯ばっかしてる。最後に立向居君は何、天使？って思った。』

「え？俺は？」

『一緒に話してたから忘れてた。』

「・・・・何気にお前Sだな、おい」

そう言っただけで笑いだした綱海さん。俺もつられて笑いだしてしまった。

「よし！！んじゃ戻るか！！」

『あいあいさー！！』

何かが吹っ切れたような気がした。

綱海さんとキャラバンに戻ると、みんなが集まっていた。

「んー？どうしたんだ、みんな集まって・・・・」

「次の勝負場所が決まったんだ！！」

とグッと拳を見せてくる守。

『何処なの？』

「はい・・・・・・・・それが・・・・」

『それが・・・・？』

春奈ちゃんが言うのをためらってる・・・・？

「揺理籠学園、なんです。」

へ？

What？

『ナニツテルカ、ワカンネーダケド？』

「「「「火月が壊れたー！！？」」「」「」

うん、なんかもう吹っ切れた！！

「しかもそれが2日後なんです・・・。」

『期限短いね・・・　というか、獣谷にみんな来るの？』

「はい、そうですよ？」

・・・・・・

『電話借りるぜ？』

もう嫌だ。

みんな‘へ？’って顔してる。

うん、だって

『あいつら何してるか分かんないもん。特にマルコとアルコが！』

そう、揺理籠は結構不良がごろついているのだ

たとえば、リボーンのヴァリアーのように！たとえば、ミルフィオリレ基地のように！

うん、俺が納めてたから良かったものの今俺が居なくて何やってるか分かんない・・・

シオンが居るだろうが、アルコとマルコは小暮並にたちが悪いから

な。

双子なだけに、息もぴったりだからなあ……………

『ということで電話借りるぜ。』

クロウに電話をかけた。

プルルル プルルル

ク「はい。」

雪『おいクロウ。』

ク「え、雪さんですかー？…………いや大丈夫ですよ!!」

ア・マ「他校と喧嘩なんてしてませんからー!!」

雪『その反応、絶対に喧嘩してんだろ!? 2日後にイナズマイレブンが揺理籠に行くから、

さっさと蹴りつける!!』

ク「えゝだって雪ちゃんが居なくなっているんな学校から喧嘩売られてますー」

ア「2日や3日で片付けられませーん。だよな、マルコ!」

マ「だよな、アルコ!」

雪『宇宙人に学校壊されつぞ、オイ。 とうか喧嘩売ってきた学校に私が今度たっぷり遊んでやると言っつけ。』

ク「はい。分かりましたよー。 その時私たちも連れてって下さいねー。」

雪『ん。じゃあしつかりお迎えしろよ。』

「了解です。」

ブチ

はあ、油断も隙もない…………

「如何だつたんだ？龍崎。所々怒ってたが・・・」

と鬼道さんが聞いてきた。

『いやゝはい、思った通り喧嘩してたぜ。でも大丈夫だ、ちゃんと喧嘩収めたからな！！』

・・・あれ？皆何で引いてるんだ？何もおかしくないじゃねーか。』

（（（（（一番お前がおかしいわ！！）））））
みんなの意見がまとまった瞬間だった。

うるさい、私だって女に戻るときぐらいある

『はあ〜ついた!〜!』

ただ今俺たちは揺理籠学園についた。

・・・はずだよな？

ん？何で他校の奴らが居る訳？

『クロウちゃん？シオンちゃん？どういうことかな？これは。（黒笑）』

「ひ、ひいいい!!雪さん!? あ、いえ、えっとこれは・・・」

言い訳は聞きたくないぜ

「（言い訳は聞きたくないって顔してるう!!）シオン、バトンタツチですー!!」

「え!？俺かよ!？えっとこれは他校の乗り込みで俺らはなんも悪くないんだよ!?!？」

だから怒りのオーラ引つ込めて」
『ふーん。』

俺は他校の奴らに歩み寄った。

「なんだお前？俺らにも『出ていけ。』お前俺らに喧嘩売ってんのか!？てかお前誰だ?!」

『火月雪女。』

ギャーーーーー!!!!!!

『負け犬めが。俺に喧嘩売っというて何逃げてんだよ。』

「「「（名前だけで追い返した！？）・・・」「」」」
「雪さん、みんな引いてますよー？」

あ、みんなの事忘れてた。

『今の忘れるよな』

「「「忘れられるかー！！」「」」」

みんな突っ込み厳しいね（汗

『ま、みんな気にせずに練習しようよ。』

「雪女さんって何もんなんすかね？・・・」

「怖いでやんす・・・」

『壁山君、栗松君、気にしないでって言ったよね？ さ、練習しよ

うか（黒笑）』

「「ヒイイイー！！」（泣）」

そんなに怖がられたら悲しいんだけど・・・

『行くよー！！』

「はいっ！！」

今現在俺たちはエイリア学園との試合に向けて特訓をしている。

そんなみんなにも規則らしきものができた。

それは・・・

「『とりやー！！！！！！！！』」

サッ

そっ、俺たちがゴールを決める時、みんなが道をあけるようになった

た。

「てか避けないと危険だろ……」

みんなが言うからそうらしい。まあ、威力はハンパないと思うよ俺も。

今では力抑えられるけど、前ゴールやぶっちゃったからな（遠い目

これがあればエイリアなんて簡単だ。絶対俺たちの揺理籠は守って見せる！！
それに……

「もう何も失いたくないんだ……っ！！」

兄貴のためにがんばるから。

そして夜になった。

お風呂に入って夕飯も食べたし、

明日はいよいよ試合だな……ふと空を見上げた。

空には星たちが自分を忘れないで、というように煌めいていた。

「あ、流れ星だ。きれいだなあ。」

久しぶりに女の子に戻れたし、流れ星と言ったらお願い事しなきゃ。

「お願い……どうかみんなと一緒に勝てますように……」

「如何したんだ？暗い顔してそれに、女に戻ったな。火月にしてはこんなこと珍しいな。」

「き、鬼道！？何時の間に居たの！？存在感ないわよっ！？」

「いつもと変わらなかったな。さっきまでの大人しさは何処へ行った？」

そう言われた時に自分でもわからないほど不安に襲われて涙がこぼれた。

「おい、大丈夫か！？そんなに深刻だったのか！？？」

私は作り笑いをした。

『ううん。大丈夫。だから気にしないで。』

「でもお前隠してるつもりなんだろうが、顔にすごくつらいつて書いてあるぞ。」

え……

『う、うそだー！！ 私は平気だm』なら何故泣いている。』そ、それは……』

私には分からない。

『自分が何故悲しいのかが分からなくて、それが矛盾していくのが怖い……』

「なら、みんなで一緒に矛盾がどうして生まれてくるのか考えればいいんじゃないか？」

『鬼道……有難う。そうだね。』

「ああ、お前には笑顔が似合う。」

『ん、分かった／＼／』

ありがとう……

星空。

それから星空を眺めながら思った。

こんなに人を愛おしいと思ったのは久しぶりだ。

守、鬼道、士郎、立向居君、綱海さん、秋、塔子ちゃん、春奈ちゃん……

それにみんなに出会えたことに感謝しないといけないって。

みんな優しくてキラキラ輝いてて生き生きとしてる。

ひとりひとりの個性があるのにその個性をつぶさない……

お互いが大切だから。

そんな仲間に出会えたことが奇跡なんだ。

さっきまでの不安が一気に何処かへ行つた。

みんなが居るから・・・

それだけで心が強くなった。

(ありがとう。) (みんなが居たから此処に居られるんだ。)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5491/>

ブリザードとスノーガール。

2010年10月9日07時43分発行